

「寄せ場」と「寄り場」など 朝日新聞の無知について

1

朝日新聞が五月八日の夕刊から「不況飯場」という連載をはじめた。何回フブクのか、はじめ、たばかりでわからないが、森富次男、百谷健郎の二人の朝日記者が釜にきて、飯場生活を体験したルポルタージューになるらしい。香園ストの最中に、ストライキどころか、はたらきぐちささる容易にみつからない釜の様子や、飯場の實際をそとの社会へ知らせるのに、多分この記事は役に立つだろうと思う。しかし、連載の一回目をよく読んでおくと二人の記者の書いていることには、釜のおれたちの目からみて、おかしいところもある。その点だけ、急いでちよつと書いておくこ

とにする。

五月八日夕刊は「寄り場」という題で、こ

んはふうに書いています。
——「寄せ場」ヨロバ——無宿人を人足として集めた場所を指す江戸時代からの言葉。労働者たちは同じ二文字を、ささやかな抵抗をこめて「寄り場」と呼ぶ。

二人の記者はわかっている。言葉の歴史はその通りだし、たしかに釜では寄り場といっていた。けれどもそれは、こんどの大谷正夫さんの文章が語っているような時代（カスミ町交差点の方に集まっていたころ）から、南海のガード下の西側に集まっていた時代までのことだ。つまり「路上手配」のころの言

葉だ。
それからいまのセンターができた。センターは役所が建てて、労働者も業者もここへ集まるときめたものだ。この時から、労働者の

ないが、いまは「寄せ場」にすぎない。そして寄せ場と呼ぶことに抵抗する労働者の気持がこめられていることを朝日の二人の記者は知らない。

2

連載のたった一回分だけにイチャモンを二つもつけては気の毒だと思ふ。しかし、いいはじめたのだから二つめもいおう。

「労働者ふう」に変装していたらしい朝日の記者は、手配にふれられて飯場へ行く。そのところは次のように書いてある。

——つれていかれたのは、意外にも大阪とは目と鼻の堺市内にある飯場。九時を少し回ったところだ。だが、親方は「みな、現慮へ出たあとや、今日は下ロゴロしとワヤ」。そのひと言で、日当の四千二百円が、ます、消えた。

はせ、堺市内は飯場があつたら意外なんだ

自主性がいくらかはあつた寄り場という言葉は死んで、昔ながらの「寄せ場」が復活した。実際に、心ある労働者はセンターを寄せ場と呼びはじめたし、釜全体がうまくこしらえられた寄せ場であることに気がついてきた。いま寄り場とわざわざいうのは、職安や労働福祉センターや警察や、要するに役所だ。それと役所のごまかしにまだ死付いてない労働者だ。それからもう一つは、わかつたようなことを書ききたがる新聞記者だ。かりにおれたたちがセンターを「寄り場」と呼ぶとしたら、それは、センターの建物管理が勤労者福祉協会なんていう業者・手配師団体へその親玉は大阪府の管理を離れて、おれたちの運営にまかされてからだろう。おれたちは釜に寄せられ、センターに寄せられ、いまはまた低成長の不況だからといって、どこかへ行くなり死ぬなり勝手にしろと散らされているのだ。

釜は自由な労働者の寄り場ではなくてはなら

ろう。この記者は、飯場というのは、山の中の
ダム工事や、トンネル工事や、そんなところ
にしかないと思ひこんでいたらしい。バ
カも休み休みいとはこんな場合だ。

古い数字けれど、西成労働福祉センター
の昭和四四年度の事業報告のなかに「大阪市
内飯場区分表」と、同じく「府内飯場区分表
」というのがある。

おれたちは自分の経験で、寺田町付近、大
和田付近、茨路付近、柴谷付近などに飯場が
ござりあるのを知っているが、新聞記者は
役所みたいなどころの調べが好きせから「こ
れについては(3)で書く」、労働福祉センター
の数字を紹介しよう。

市内各区ごとの飯場の数はこうなっている
のだへ平野区、住之江区、淀川区、鶴見区な
ど新しい区はこの調べには出てこない。

北区11、都島区9、福島区2、此花区38、
東区1、西区6、港区13、大正区33、天王寺

話だ。もちろん、仕事はしなくてもメシは食
うから、勘定するときメシ代は一日分として引
かれるへこくたまに引かないところもある。
だが、日当にならず、メシ代を引かれても、
着いた日にゴロゴロしてるのは、労働者にと
つてそんなにイヤなことではないのだ。話の
わかるオヤジ、アネゴはら、諸式”の酒の
一本ぐらひ出してくれるし、ユロゴロしてテ
レビでも見ながらその飯場のフインキなんか
観察する必要もある。メシ食って酒をのんで、
うすくい、たらたらの一つぐらひもらつて、

区11、南区0、浪速区10、大淀区3、西淀川
区15、東淀川区5、東成区1、生野区11、旭
区3、城東区26、阿倍野区4、住吉区37、東
住吉区14、西成区18

この数字には、ある工事の期間だけの現場
飯場と、半永久的な飯場へ主に、人夫出し
しの区別がなければ、一つの傾向みたいな
ことの資料にはなる。「府内」の方は略すが、
多いのは東大阪市、豊中市、堺市、高槻市、
などとなっている。堺が一番で外だ。

一体この記者はなぜ飯場が堺市にあつて意
外だったのか、聞いてみたい。

それから、さっき紹介した短い記事のなか
で、この記者はまだおかしなことを書いてい
る。

親方に「今日はゴロゴロしとけや」といわ
れて、その日の日当が消えたというところだ。
几時すぎに飯場へ着いたら、みんな仕事に
出て留守なのは当たり前、現場飯場でない限り
は、着いた日は仕事なしになるのも当たり前

なければ、ゴロゴロしていたのが釜の労働
者の常識とらつてもいい。やみくもに抜きた
がる出稼ぎとそこがちなうの。

3

なぜ二人の記者へあるいは新聞記者たち全
体がこういうこと知らないか、わからな
いか。ちいさな証拠を一つ出しておこう。こ
れもやっぱり朝日新聞からだ。

五年十一月二一日の朝日新聞朝刊は次の記
事をのせていた。

だが、日当にならず、メン代を引かれても、着いた日にゴロゴロしてるのは、労働者にとってそんなにイヤなことではないのだ。話のわかるオヤジ、アネゴなら、*「諸式」*の酒の一本ぐらい出してくれるし、ゴロゴロしてテレビでも見ながらその飯場のフンイキなんか偵察する必要もある。メン食って酒をのんで、うまくいったらタバコの一つぐらいもらって、いざ仕事という明日の朝にはトンコ（逃げる）するのも、労働者のシノギの手だ。

とにかく、どっちにしても、この記者さんのように、飯場へ着いた日にさっそく仕事に出よう（賃金がほしい）なんて思うのは、よっぽどさし迫った事情のある者だけで、大ていは、屋根とメンとフトンのある飯場へ行ったら、一日はのんびりしたがる。別に自分の家を建てるわけでなし、食うと寝るのに心配なければ、ゴロゴロしていたいのが釜の労働者の常識といってもいい。やみくもに稼ぎたがる出稼ぎとそこがちがうのだ。

なぜ二人の記者（あるいは新聞記者たち全体）がこういうことを知らないか、わからないか。ちいさな証拠を一つ出しておこう。これもやっぱり朝日新聞からだ。

去年一月二一日の朝日新聞朝刊は次の記事をのせていた。

厳しい冬迎える「あいらん地区」

食べ物大幅アップ

就労難で \gg 出張 \ll も

不況の酒・しょうちゅう復活

こういう見出しの相当長い記事で、おれたちの生活が苦しくなっていることを書いてある。わるくない記事に見えるものだ。

ところがこの記事のなかみになつてる食い物のネダンは、西成ケーサツ防犯コーナーで調べたもの丸うつしで、書いた記者が自分で調べていない。

その上、ついている写真がまたひどくて、おれたちが見ればすぐわかるのだが、西成ケーサツの二階の窓か屋上あたりで写したものだ。つまり記事も写真もケーサツにもたれかかって作られているということだ。

こんどの「不況飯場」という連載と、去年の記事・写真が、同じ記者の仕事かどうか、そんなことは知らない。しかし要するに同じアナのムジナで、まあ労働者に同情し、理解を示そうとはしているけれどダメなんだなそれが。朝日だけがダメなんじゃなくて、そこらがマスコミの限界ということだよ。